

世界的に感染者が報告されている新型インフルエンザと今後の国際協力について、感染症の専門家、長崎大熱帯医学研究所教授の山本太郎さんに解説してもらった。



山本太郎・長崎大熱帯医学研究所教授

新型インフルエンザ

世界保健機関(WHO) 最も多い。世界最悪の状況は四月二十七日、新型インフルエンザの流行に関する警戒水準を「3」から「4」に引き上げた。「新型インフルエンザ発生」の宣言であった。

寄稿

それから約一カ月。現状はといえば、ウイルスが弱毒性ということもあり、被害状況はそれほど深刻なものとはなっていない。良い知らせである。死者数はメキシコで

因で、先進国より高い致死率を示しているとすればどうか。今後、新型インフルエンザがアフリカやアジアの国々に広がったとき、



新型インフルエンザの流行を受け、マスクを受け取るメキシコ市民 (A P=共同)

国際的な共同戦線を

予想される「南北格差」

被害は大きなものとなる可能性がある。特にエイズや結核、マラリアといった感染症によって既に多大な影響を受けている国々で新型インフルエンザの流行が重なった場合、被害は予想を超える範囲に拡大し、深刻化するかもしれない。そうした状況に対し、国際社会の足並みは必ずしもそろっていない。五月二十二日開幕したWHO総会でも、抗インフルエンザ薬やワクチンの分配をめくり、開発途上国側から異議申し立てが相次いだ。医療資源の先進国偏在への不満と、それによってもたらされるかもしれない被害規模の格差への抗議である。今後こうした「南北問題」は国際社会で論点となるだろう。

被害は大きなものとなる二年という時間で必ず終息するとみられる。感染し回復した人々が免疫を獲得するからだ。そして、新型インフルエンザが実際に終息したとき、私たちは被害の状況を検証することになる。発生期の対策が適切だったか、という評価も行われるだろう。そのとき、国際交渉の舞台裏などでは、日本があるいは先進国がどのような海外協力を実施したかが問われることになる。

感染被害があつという間に国境を超えるグローバルイズム時代に、地球規模の感染症問題に取り組みに終始せず、いかに助け合い、国際的共同戦線を張れるかを考えていくのも、新型インフルエンザの感染を体験した今の私たちに求められていることの一つではないかと思う。

最終的な被害の推定は難しいが、重要な疫学的視点として、新型インフルエンザは一年あるいは二年という時間で必ず終息するとみられる。感染し回復した人々が免疫を獲得するからだ。そして、新型インフルエンザが実際に終息したとき、私たちは被害の状況を検証することになる。発生期の対策が適切だったか、という評価も行われるだろう。そのとき、国際交渉の舞台裏などでは、日本があるいは先進国がどのような海外協力を実施したかが問われることになる。